本興寺だより

令和五年 十一 月
第二五一号

「佛法を習う身には必ず四恩を報ずべき。・・四恩とは一には一切衆生の恩、二には父母の恩、三には国（王）の恩、四には三宝（仏・法・僧・＝仏様と、その説かれた教え、それを正しく伝える人）の恩なり」

（宗祖　四恩鈔）

ロシアとウクライナの戦争が続いている一方で、中東ではパレスチナとイスラエルの戦争が勃発し、世界は大規模な戦争に拡大しかねない危険があります。

誰もが平和を願い、戦争はしてはいけないと皆思っています。しかしどうしてもそこまで行ってしまう人間の業を見せられている気がします。

戦争は自らの正義と相手の正義のせめぎあいから生まれます。一般社会でも、己の正義に固執し突っ走り過ぎると、対立を生じ、被害を被ることも出てきます。人の善悪の行為『業』は、個人に留まらず、家庭としての業も、民族としての業もあると云われます。

先のイスラエルについて少し述べますと、イスラエル（ユダヤ人）は、優秀な民族でありながら歴史的に長く迫害を受けてきた民族です。ナチスドイツによるホロコースト（大量虐殺）で数百万人が殺害されましたが、これはヒトラー一人でできることではありません。ヨーロッパ各地からユダヤ人が強制収容所へ送られ殺されましたが、移送したどの国も、ユダヤ人がどうなるか気付きながら、消極的な協力をしたのです。

何故ユダヤ人がこれほど嫌われていたか？聖書の中では、キリストを殺したのは結果的にユダヤ人だとあるのです。キリスト教信者の心の根底にある、ユダヤ人を嫌う大きな無意識の理由の一つです。

第二次大戦の後、ユダヤ人の虐殺の悲劇に対するヨーロッパ人の懺悔や後ろめたさ、同情の気持ちもあり、ユダヤ人がパレスチナに建国する国連決議が採択されました。そこにはパレスチナ人が多く住んでいましたが、土地を無理やり分割され、狭められ、現在に至っています。その怨念、恨みは民族に引き継がれています。

双方とも大国に翻弄されてきた歴史があります。

人は生まれる国、環境によって人生が大きく左右されます。日本は平和で、民主主義で、四方を海に囲まれ、安全で豊かな国だとつくづく思います。

日蓮聖人は、冒頭の文のように、人は多くの人々や環境の中で、たくさんの支えで生きているのだから、先の四恩を知り、その恩に報いる生き方が大事だと云われます。その中に「国の恩」とあります。

私達は国の恩ということをあまり意識していません。一つの国家や一つの民族。民主主義、平和は当たり前のことではありません。戦乱に巻き込まれて命を落としたり傷ついたりする人は世界で沢山います。外国の要人から「日本人は安全と水はただで手に入ると思っている」との声もあります。例えば核シェルターの普及率はイスラエル百％、アメリカ八十二％、日本は０・０二％とのことです。先進国で極端に低いのです。最悪を想定して施策を立てる国家も多いのです。

核シェルターがどうこうではなく、国と国との問題は、領土問題にしても、対話で簡単に解決できず、力のバランスが崩れれば、何時火の粉が上がるか分からない危険性を含んでいます。

政治家は、スキャンダルに関心を持たず、国益、国民のための論争に徹して欲しいものです。

国から受ける恩は多大なものがあるのです。豊かな自然と美しい国土、郷土に生きている恩に感謝の気持ちをひと時でも持つことが大切なのです。

人の一生も、如何なる困難な時でも、この四恩の気持ちを忘れず保つと、必ず神仏の光が届いてくると云われます。

人は自分の人生に嫌気がさし、行く末に自信を無くし、あきらめの気持ちになることもあります。

将棋の藤井聡太さんが、九十九％敗色濃厚から大逆転して八冠を取得したように、人生も将棋と同じ、大逆転があるのです。四恩の心を忘れなければ。

恩とは、他のものから与えられる慈しみ、恵み、思いやりです。目に見えないところで人を支え育てて下さった「お蔭」の力です。それを知ることが知恩、それに報いることが報恩です。

「恩」の字は因に心と書きます。「因」は口に大と書きます。口は布団であり、その真ん中に人が大の字になって寝ている姿です。多くの人の支えや目に見えない力によって包み込まれ、安心して休む姿です。

現在の自分を育ててくれた原（因）を知り感謝する心でもあります。

感謝の謝とは、言ベンは心の誠を口から発し相手の心に真心を届ける（射）の意味。また謝とは、謝（罪）の言葉のように、「すみません」と、自分の至らなさを素直に詫びる心の柔軟さを兼ね備えた心でもあると云われます。

秋が深まれば紅葉が色鮮やかさを増し、やがて散っていきます。紅葉は、木々が寒暖の差、日光と雨、風や湿度等全てを受け入れて、より鮮やかさを増していきます。

秋空の下、野面や水辺を飛ぶ蜻蛉（トンボ）はのどかで美しいものです。余談ですが、トンボを絵にかくと「キ」の字になるので、以前は気障（きざ）な人を「トンボにサの字」といったのを覚えている人もおられるでしょう。

春は花が咲き、秋は木の葉が紅葉する。その自然の在り様が物事の本当の姿であり、人の生き方、命の在り様をも教えているのです。人生の紅葉も、試練の風雨や寒暖に耐えぬいた時、いっそう鮮やかさを増すのだと云われます。

合掌

本興寺住職　中谷　聰秀